

若年層の老人観に関する研究

高橋 宗・水野邦夫

わが国は昭和45（1970）に、総人口に占める65歳以上人口の割合（高齢化率）が初めて7%を超え、いわゆる高齢化社会の仲間入りをした。その後高齢化率は上昇を続け、平成6（1994）年には倍の14%までに達し、7%から14%に到達した速度を各国間で比較すると、フランス114年、スウェーデン82年、アメリカ69年、イギリス46年、ドイツ42年に対し、日本はわずか24年であり（松本, 1998）、わが国の高齢化が急激に進んでいることが窺える。また、厚生省と国立社会保障・人口問題研究所が平成9（1997）年に発表した「将来推計人口」によると、1）65歳以上の老年人口が平成9年中に15歳未満の年少人口を上回り、2）平成37（2025）年には国民の4人に1人が高齢者になること、などを予測している。急激に進む高齢化は新たな社会問題（例えば、労働力の確保や老人医療・介護など）を生み出すこととなり、本格的な高齢社会に向けて多面的な対策を講じる必要性に迫られている。

そのようななかで、心理学の分野における老人研究—すなわち老年心理学はどのような発展を遂げてきたであろうか。下仲（1998）は、欧米およびわが国の老年心理学の流れを概観しているが、わが国についてみると、老人研究は高齢化社会の到来を機に本格的に始まった観があり、昭和47（1972）年にはわが国唯一の老化、老年病、老人問題等の研究所として東京都老人総合研究所が設立され、心理学者による本格的な老年心理学研究がスタートし、現在までにさまざまな研究成果が蓄積されているようである。また、日本教育心理学会や日本発達心理学会をはじめ、多くの心理学系の学会においても老人研究が散見されるが、たとえば平成10（1998）年に開催された「日本教育心理学会第40回総会」だけを見ても、老年期に関する研究発表は少なくとも10点はあるようであり、主観的幸福感、ソーシャル・サポート、記憶、Q

OL (Quality of Life) などの観点から老年心理を調べたものや、年齢層による考え方の変化を検討したものなどがある (佐藤, 1998)。このように老年心理学研究は、もちろんまだ不十分な点が多いが、今後ますます展開されていくであろうと思われる。

ところで、高齢社会を考えた場合、老人を扶養・介護するのに大きな役割を担うのは、若年層・中年層ということになろう。それでは彼らは老人に対してどのようなイメージを持っているのであろうか。老人に対するイメージは中立的な意味合いを持つものはきわめて少なく、ほめ言葉か貶し言葉がほとんどであるという (松下, 1987)。また、先の下仲 (1998) はわが国の老人観についてもレビューしているが、敬老精神の衰退を応急処置的にカバーする傾向 (敬老の日の制定、シルバーシートの設置、「老人」から「高齢者」への呼称の変更、など) があるものの、健康で活動的な老人が増加してきたために、「老女」や「老婆」などの呼称が滅多に用いられなくなってきたことから、老人イメージが改善されつつあるのではないかと論じている。しかし、老人研究は基本的に被験者や調査対象が老人であることから、若年層や中年層からみた老人イメージの研究についてはまだそれほど多くないのではないかとと思われる。先の佐藤 (1998) によれば、日本教育心理学会第40回総会においては、医学部生が介護体験実習をすることで高齢者イメージがどのように変化するか、また高齢者と面接を行うことで学生の高齢者イメージがどう変化するかといった、何らかのきっかけが老人イメージの変化に影響するという主旨の研究発表がみられたという。これらの研究は、高齢社会に際し、老人に対して持っているさまざまな固定観念をどのように変化させることが可能であるかを模索したものであると考えられ、特に若年層が高齢社会にどのような関与をすべきかについての示唆を与えてくれるものとして評価できよう。しかしながら、それ以前に、若年層が老人 (高齢者) をどのように捉えているのか、そしてそれを規定するものは何であるかという基本的な点に立ち返り、「若年層からみた老人」について考える必要があるのではないかとと思われる。そこで本研究では、とくに若年層の老人観に焦点を当て、

彼らがどのような老人イメージを持っているかを調べることを目的とした。また、老人イメージを規定する要因として第一に考えられるものに、男女(性別)や身近な老人である祖父母との同居・別居による捉え方の違いがあると思われるが、これらが老人イメージにどのように影響するのかを検討することを目的とした。

方 法

被調査者 滋賀県内の一短期大学において、心理学関係の科目を受講した学生209名(男子87名、女子122名)に対し、下記質問紙への回答を依頼した。

質問紙 調査にあたり、1)学年、性別、年齢、祖父母との同居の有無などを尋ねる項目、2)老人のイメージを評定させるため大山・瀧本・岩澤(1993)の24形容詞対(SD法による評定)、3)自分の祖父母それぞれ(父方、母方の祖父母の計4名)とどれくらいコミュニケーションがとれているか(疎通度)、などを掲載した質問紙を作成した。なお老人のイメージとコミュニケーション疎通度については5段階評定で回答できるように作成したが、疎通度(1～5点)については、すでに祖父母が他界しているなどコミュニケーションの記憶がない場合には0点をつけられるようにした。

手続き 上記の質問紙を授業時間の一部を利用して、集団法により実施した。

結 果

老人イメージの特徴について 老人イメージを評定させた24の形容詞対それぞれについて、被調査者の回答の平均評定値を算出した。その結果を図1に示す。図1をみると、「自然な」、「暖かい」、「明るい」、「陽気な」、「好きな」のように肯定的な評価がいくつか認められる。これらを総合すると、老人に対して親しみやすいイメージを抱えていることが窺える。しかしその反面、「弱い」、「カサカサした」など身体的特徴からくるとと思われる衰退的なイメージや、「不安定な」、「地味な」、「古い」、「きたない」

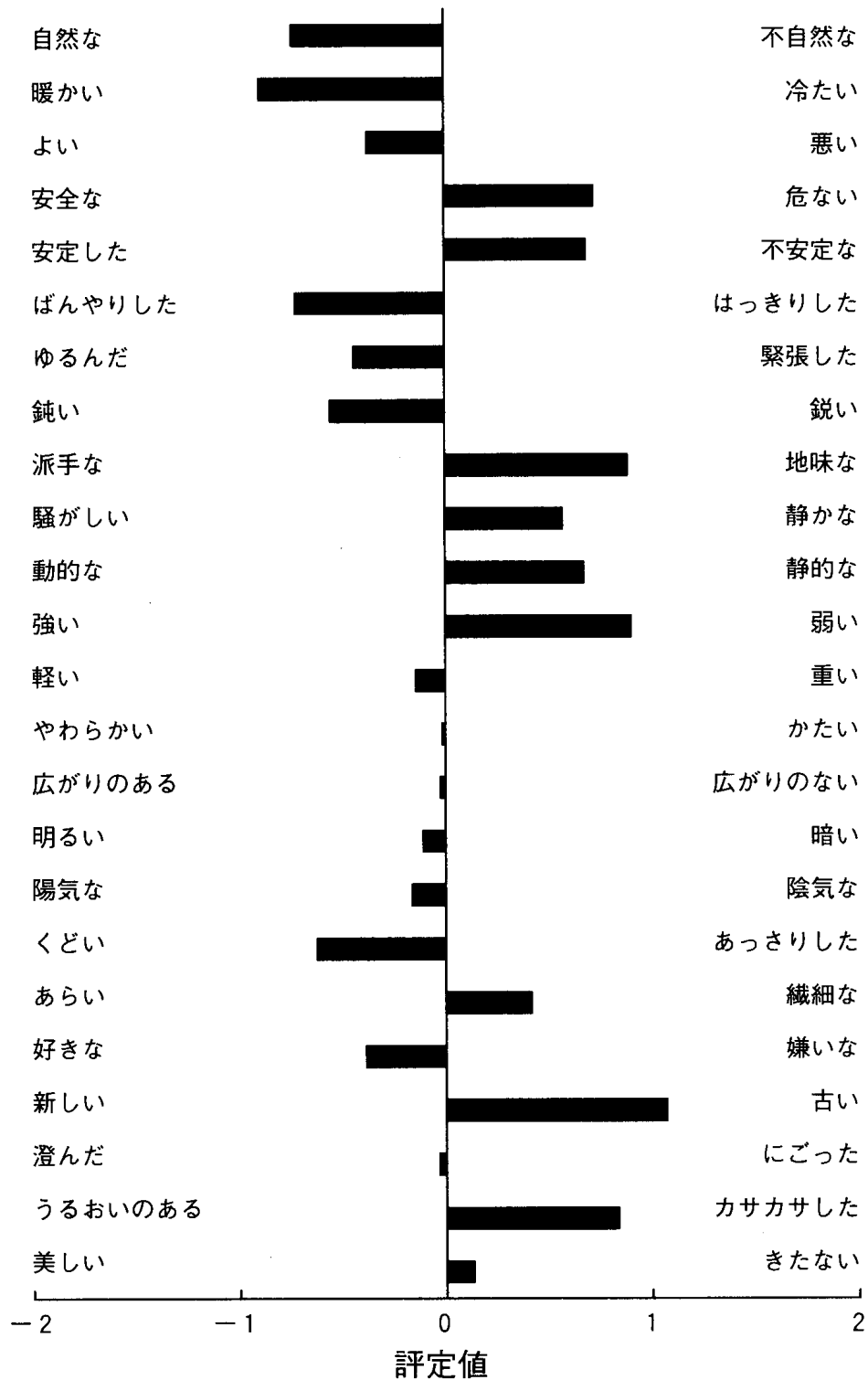


図1 形容詞対の平均評定値

註：実際の評定に際しては、対の左から5点、4点…1点として評定を求めた。

表1 老人イメージの因子分析結果

項目\因子	I	II	III	IV
美しい-きたない	.625	.052	.097	.102
うるおいのある-カサカサした	.514	-.058	.148	.154
澄んだ-にごった	.498	.296	.020	.084
新しい-古い	.496	.120	.484	.009
好きな-きらいな	.492	.280	-.070	.243
あらい-繊細な	-.464	-.314	.290	-.141
くどい-あっさりした	-.492	-.068	.005	-.023
陽気な-陰気な	.087	.744	.183	.210
明るい-暗い	.101	.675	.203	.142
広がりのある-広がりがない	.047	.493	.087	.297
やわらかい-かたい	.265	.430	-.079	-.062
軽い-重い	.018	.274	-.137	-.045
強い-弱い	-.013	.084	.554	.378
動的な-静的な	-.033	.057	.491	.056
騒がしい-静かな	-.132	.006	.474	-.125
派手な-地味な	.084	.215	.454	.103
にぶい-するどい	-.285	.041	-.330	-.306
ゆるんだ-緊張した	-.082	.114	-.355	-.048
ぼんやりした-はっきりした	-.297	.115	-.383	-.181
安定した-不安定な	.064	.085	.282	.675
安全な-危ない	.242	.136	.072	.535
よい-悪い	.400	.395	-.046	.422
暖かい-冷たい	.353	.286	-.349	.353
自然な-不自然な	.317	.142	-.258	.320
寄与	2.588	2.170	2.099	1.725
<説明率 (%)>	10.78	9.04	8.75	7.19

註：I…審美性因子 II…快活性因子 III…活動性因子 IV…安定性因子
 ゴシック太字は因子負荷量±0.4以上または以下を表す。

などの否定的なイメージも強く抱いているようであり、先の松下（1987）などにもみられうように、老人にはよいか悪いかの極端なイメージで捉えられているのがわかる。

老人イメージの因子分析 まず老人イメージの次元を調べるために、24形容詞対について因子分析（主因子解、Varimax 回転）を行った。なお、固有値の推移と解釈可能性とを考慮して、因子数は4因子に指定して分析を行った。因子負荷量行列と寄与率を表1に示す。

第1因子は「美しいーきたない」、「うるおいのあるーカサカサした」、「澄んだーにごった」などの項目が高く負荷しており、審美性と解釈できよう。第2因子は「陽気なー陰気な」、「明るいー暗い」、「広がりのあるー広がりのない」などが高く負荷しており、快活性と解釈できよう。第3因子は「強いー弱い」、「動的なー静的な」などが高く負荷しており、活動性と解釈できよう。第4因子は「安定したー不安定な」、「安全なー危ない」などが高く負荷しており、安定性と解釈できよう。

イメージへの性差および同別居の影響 次に、被調査者の性別や彼らが祖父母と同居しているか否かが、老人イメージにどのように影響するかを調べるために、上記の各因子の標準因子得点を従属変数として2（性別）×2（祖父母との同別居）の分散分析を行った。なお、各群の平均等を表2に示す。

表2 各群における老人イメージ因子の平均

	N	審美性	快活性	活動性	安定性
男子ー同居	30	.045(.872)	-.086(1.015)	-.132(.806)	.006(.767)
男子ー別居	55	.054(.974)	-.097(.984)	.035(.864)	.220(.872)
女子ー同居	54	-.020(.856)	.051(.806)	.253(.884)	.015(.837)
女子ー別居	65	-.069(.809)	.068(.758)	-.206(.863)	-.199(.752)

註：カッコ内はS D

分析の結果、活動性では同別居の主効果に有意な差の傾向が、また性別と同別居の交互作用に有意な差がみられ（各 $F(1,200) = 2.92, p < .10$; $F(1,200) = 6.20, p < .01$ ）、安定性では性別の主効果に有意な差が、また性別と同別居の交互作用に有意な差の傾向がみられた（各 $F(1,200) = 4.71, p < .05$; $F(1,200) = 3.27, p < .10$ ）。さらに交互作用の有意なものは下位検定を行ったが、活動性では、祖父母と同居している女子の方が同居男子や別居女子よりも、有意に活動性が高いとみなしており、また別居している男子は女子よりも有意に安定性が高いとみなしているという結果が得られた。

コミュニケーション疎通度について 先の分析で祖父母と同居している女子は、同居している男子や別居している女子よりも老人を活動的とみる傾向が高いことや、祖父母と別居している男子は、同じく別居している女子よりも老人を安定した存在として捉える傾向が高いことが示された。そこで各群について、祖父母とのコミュニケーション疎通度を算出した。なお算出にあたっては、父方、母方の祖父母4名それぞれについてたずねた値の合計値を求めた。各群の疎通度の平均評定値を表3に示す。結果をみると、特に同居女子の値が高いと考えられるので、これと他の各群の平均の差を t 検定により検討したところ、同居女子と他の3群の間には有意な差(もしくは傾向)がみられた(各、 $t(80) = 1.88, p < .10$; $t(106) = 2.49, p < .05$; $t(118) = 2.31, p < .05$)。

表3 3群におけるコミュニケーション疎通度の平均

	男子—同居	男子—別居	女子—同居	女子—別居
<i>N</i>	28	54	54	66
	9.79 (3.91)	9.57 (4.16)	11.54 (4.05)	9.74 (4.39)

註：カッコ内はSD

考 察

本研究は、若年層が老人をイメージする際、性別や祖父母との同居・別居がどのように影響するかを調べることを目的とした。老人イメージの分析結果から、若年層の老人イメージは決してネガティブなものだけではなく、むしろ老人に対して親しみの念を持っていることが明らかとなった。この傾向が近年の若年層に特有なものであるかどうかは不明であるが、昨今は介護保険の問題など、高齢者に焦点を当てた報道が多くみられることや、テレビのバラエティ番組等で高齢の芸能人が活躍していたり、一般の高齢者が番組に参加したりすることなどがあり、マスメディアなどを通じて老人を身近に感じる機会が増えてきているのではないかと考えられる。

次に、老人イメージが性別や祖父母との同居・別居にどのように影響されるかについてみると、まず祖父母と同居している女子は他と比べて老人を活動性が高いとみる傾向があるという結果が得られた。これは祖父母と同居しているような三世代家族において、同女子が家庭内で祖父母の世話役（必ずしも身のまわりの世話を指すのではなく、話し相手になるなども含む）にまわる機会が多く（これは彼女らの祖父母とのコミュニケーション疎通度からも推測される）、老人が意外に活動的であることを実感しているためであると考えられる。

一方、安定性の面では同居している男女にあまり差がみられなかったのに対し、別居している男女では大きな差がみられた。この差を今回のデータのみから考察するのは困難であるが、元来男子の方が女子よりも老人を安定したものと認知する傾向があるうえに、別居していることで老人の実状を十分に把握していないために、一層大きな差として現れたのではないかと考えられる。しかしながら、コミュニケーション疎通度の結果と突き合わせて考えると、必ずしもこのような考察は適切ではない。今後この点については、さらに検討していく必要がある。

また、審美性や快活性について性別や同居・別居の影響がみられなかったことは、これらが別の要因によって形成されていることを表していると考えられ

る。例えば、先に触れたようにマスメディアの影響なども考慮する必要があるかもしれない。さらに若年層だけではなく、他の層との比較を行うことによって、老人イメージの形成過程がより判然とするであろう。

引用文献

- 松本吉平 1998 健康・生きがいつくり総論 生きがい情報士養成テキスト
1 健康・生きがい開発財団
- 松下正明 1987 老人観の歴史的変遷 老年精神医学, 4, 6-14.
- 大山 正・瀧本 誓・岩澤秀紀 1993 セマンティック・ディファレンシャル法を用いた共感性の研究 行動計量学, 20, 55-64.
- 佐藤有耕 1999 中学生以上を対象とした研究の動向 教育心理学年報, 38, 64-73.
- 下仲順子 1998 老年心理学研究の歴史と研究動向 教育心理学年報, 37, 129-142.

付 記

- 1)本研究のデータ収集にあたり、本学情報社会学科の西川明里さんのご協力を得ました。ここに厚く感謝の意を表します。
- 2)本研究は、関西心理学会第111回大会（於 神戸学院大学）にて口頭発表された。